CITIZEN OF THE YEAR 2018

社会に感動を与える人々を
応援します

「飛んでけ！車いす」の会によせて

飛んでけ!というフレーズがとても斬新で印象的でした。
車椅子を運ぶではなく飛ばすという言葉の選び方が素晴らしくてこの字を選びました。
武田 双雲

01 | CITIZEN OF THE YEAR 2018

旅行者の協力に支えられ 車いすを届けて20年

NPO法人「飛んでけ!車いす」の会／「とんでけ!くるまいす」のかい　北海道札幌市

人々に感動を与え、社会に希望の光を灯す活動に
私たちはこれからもエールを送り続けます。

シチズン時計株式会社
代表取締役社長
佐藤 敏彦

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、社会の発展や幸せ、魅力づくりに貢献し、社会に感動を与えた良き市民を称え、顕彰するもので、今年で29回目を迎えました。

今年も本当に素晴らしい方々を表彰させていただくことができました。受賞者の皆さんそれぞれの活動は、不登校の子どもたち、海外で車いすを必要としている方、そして被災地で避難されている方々などに寄り添ったものであり、他者への温かい思いやり、優しさにあふれていることに感動いたしました。

私たちはこれからも、このシチズン・オブ・ザ・イヤーを通じて、社会に感動を与えてくれる市民に光をあて、その心を打つ活動をたたえ、エールを送ってまいります。

シチズン・オブ・ザ・イヤーとは

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰しています。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙の中から、賞にふさわしい記事を選び、主要新聞の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

2018年度 選考委員会

● 委員長	山根 基世	元NHKアナウンス室長
● 委員	磯崎 由美	毎日新聞社 社会部長
	香山 リカ	精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授
	高野 真純	日本経済新聞社 社会部長
	田中　光	朝日新聞社 社会部長
	中村　将	産経新聞社 社会部長
	平尾 武史	読売新聞社 社会部長
	益子 直美	スポーツコメンテーター

敬称略・五十音順
※肩書は、2019年1月現在

Contents

3 NPO法人
「飛んでけ! 車いす」の会
旅行者の協力に支えられ車いすを届けて20年

7 濱田 龍郎さん
全国の被災地や福祉施設に10万杯超のラーメンを提供

11 NPO法人
全国不登校新聞社
不登校の子どもたちや親に当事者視点で寄り添い続ける

15 対 談
シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長 山根 基世さん ＆ 2018年度受賞者 NPO法人 全国不登校新聞社

18 歴代受賞者一覧

各受賞者へ贈る書

書道家
武田双雲

1975年熊本生まれ。東京理科大学卒業後、NTTに就職。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」など、数々の題字を手掛ける。講演活動やメディア出演、著書出版も多数。海外でも書道ワークショップや個展、講演を行うなど、世界各国で活躍する。

「飛んでけ！車いす」の会

手から手へ、心も届け！あなたのための車いす

「これからは家族と一緒にごはんを食べたり、
お父さんお母さんが果樹園で働く姿を見ることができます」
障がいのためベッドでしか生活できなかったベトナムの女性に車いすを届けた
吉田三千代さんは、そのときの笑顔が今も忘れられないと言います。
「飛んでけ！車いす」の会の活動は、
そんなたくさんの笑顔に支えられています。

吉田さんがバングラデシュを訪ねたことが
活動の原点となった

旅行者が手荷物として届ける仕組みで協力の輪を広げる

「バングラデシュにどんな支援が必要か、ご自分の目で見て考えてください」。1997年7月、札幌で英語講師をしていた吉田三千代さんは、バングラデシュから来日した障がい者団体の代表が講演会で話した言葉が胸に残りました。

その年の12月、吉田さんはバングラデシュの現実を見なければと首都ダッカのスラムを訪ねました。そこで、人々の明るさに触れると同時に、生活環境の厳しさや障がい者が不自由を強いられている現状を目の当たりにしたのです。

日本に戻った吉田さんは、自分に何ができるかを考え、車いすを送ろうと思い立ちました。養護学校の知人に聞いてみると、日本では、子どもは成長に合わせて車いすを乗り替えたり、大人にも買い替えを補助する制度があり、使われていない車いすが多くあることがわかりました。しかし、費用を調べると、海外に船便で車いすを送るには50万円以上かかります。

そんなとき、友人から耳寄りな情報が入りました。「知り合いの大学生が、手荷物で車いすを海外に持って行ったけど無料だった」というのです。早速、当時北海道大学の医学部4年生だった柳生一自（かずよし）さんに連絡を取り、重さが20キロ以内なら、飛行機の手荷物として運べることを知りました。

直接会った吉田さんと柳生さんはすぐに意気投合。継続して車いすが送れる仕組みを作るため、週に一度は会って相談し、1998年5月、柳生さんを代表に、吉田さんを事務局長に「飛んでけ！車いす」の会を設立したのです。数日後、2台の子ども用車いすがタイに向け飛び立ちました。

活動を始めた当初、車いす運搬の中心を担ったのは
学生ボランティアだった

旅行者がボランティアで車いすを届ける仕組みは斬新で、新聞などでも紹介され協力の申し出が一気に増えました。「最初は1年に30台送れれば10年で300台は送れると思ったのが、3年で目標に達しました」と振り返る吉田さん。それでも、当時は現在のようにインターネットやメールが普及していない時代。電話とFAXでしかやり取りができない相手も多いため、使う人の体の大きさや障がいの状況を詳しく知ることができず、送り手として葛藤も多かったそうです。

整備マニュアルも作成し、現地に技術も伝える

2002年頃から贈り先の国々にもインターネットが普及し、使用者の情報が詳細に取れるようになり、車いすのカスタマイズがスタートしました。福祉施設や個人などから提供してもらった車いすは、一台ごとに座幅や背もたれ高、フットレスト高、重量などを計測。シニアボランティアを中心とした整備チームによって、データベース化されます。

多くのシニアボランティアが活躍する
「飛んでけ!車いす」の会。
真剣な作業の中にも
常に明るい笑顔が絶えない

障がいに合わせ、最適な車いすに調整

これらの車いすを届けるため、海外とやり取りをするのがコーディネーターです。旅行者からボランティアの申し出があると、渡航先に車いすを必要とする人がいないか照会。希望する人が見つかると、体の特徴や障がいについて情報を提供してもらいます。

コーディネーターの太田さんは、「海外の方が相手でも、こちらは車いすを届けたい、相手は車いすが欲しいという目的がはっきりしているので、互いに意思が通じ合うのです」と話します。最も気を配るのは相手にマッチした車いすを送ること。本人に合わない車いすは体に負担をかけますが、座ってもらって調整するということができないため、整備チームへ提供する情報には細心の注意を払います。

データベース化され、サイズや
タイプごとに整然と並ぶ車いす

車いすを直接手渡し喜ばれることは、
ボランティアにとっても感動的な体験

小さな力が集り、支えられてきた活動

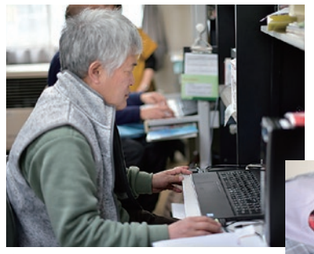
必要とする人の体格や
障がいの状況にあっているか、
入念にチェック

データベースから選ばれ、丁寧に整備・調整された車いすは、旅行者の搭乗日に合わせて空港に届けられます。こうして手荷物として運ばれた車いすは、現地の空港で手渡すこともあれば、自宅を訪ねて直接届けることもあります。受け取った人の笑顔に触れる体験は旅行者にとって格別で、何度もボランティアに協力している人が少なくありません。

また、「飛んでけ！車いす」の会では、届けた車いすをできるだけ長く良好な状態で使ってもらえるよう、英語、インドネシア語版の整備マニュアルを作成。現地を訪れて整備や修理の技術を伝えているほか、習得した技術が雇用につながることも目指しています。近年ではインドネシアのバリ島やネパールなどを整備チームが訪れて技術を伝え、参加したメンバーからは「実際に行ってみて初めて現地の〝必要〟が見えてくる」という声も聞かれました。

旅行者にも使用者にも感謝される喜び

この20年の間には、航空会社の預け入れ荷物の重さやサイズの制限が厳しくなったり、格安航空会社の参入で手荷物に追加料金がかかるといった課題も出てきています。このため、規定のサイズに収まるよう、部品の一部を取り外して梱包するなど、さまざまに対応しています。また、ボランティアで協力してくれる旅行者にも変化があり、当初は学生の旅行者が多かったのが、現在ではシニアが増えてきています。



車いすを届ける海外とのやり取りは、
コーディネーターが担う

提供された車いすは、
サイズや特徴などが直ちに
データベース化される

良好な状態で長く車いすを使用してもらえるよう、整備技術も伝えている

「飛んでけ！車いす」の会のスタッフも、発足当初は学生が中心でしたが、こちらもシニアが担い手になり、吉田さんは「それぞれが、語学力や機械整備、縫製など得意な技術を生かし、一人ひとりの小さな力が集まって会が支えられています。活動が続く原動力もそこにあります」と話します。この20年で世界80カ国以上に届けた車いすは、2900台を超えました。

車いすを受け取った人からは、「私の人生を変えてくれました」「車いすに乗ってどこでも行くことができます。感謝しています」など、数え切れない喜びの言葉が寄せられています。旅行者からも、「今までの人生で最も素晴らしい体験」「人生観が変わった」など感動の声が届けられています。

受け取った人の笑顔の写真を見るのが一番うれしいと話す吉田さん。「大事なのは単にモノを送るのではなく、『あなたのための車いす』を、気持ちを込めて直接手から手に渡していることなんです」。今後も、心の込もった車いすが世界中に飛んで行きます。

車いすを受け取った人の笑顔の写真を見るときが一番うれしい瞬間だ

濱田龍郎さんによせて

ご自身の一番の得意分野に絞って麺を届け続けられたこと、本当に素晴らしいと思います。
どれだけの人の心を麺であたためてきたのでしょう。
武田 双雲

全国の被災地や福祉施設に10万杯超のラーメンを提供

濱田 龍郎さん／はまだ たつろう　1944（昭和19）年生まれ。熊本県在住

濱田 龍郎さん

一杯のラーメンがつなぐ 笑顔と笑顔、心と心

「皆さん、一緒にラーメンを食べませんか?」
全国の被災地や福祉施設を訪ねたとき、
濱田龍郎さんは決まってそう語りかけます。
「届けにきました」とも、「食べてください」とも言いません。
皆が同じ目線でラーメンを楽しみ笑顔になって心が通い合う、
それが「九州ラーメン党」のボランティアです。

障がいを持つ少年と出会い、ボランティアの道へ

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生。折しも急性すい炎の治療中だった濱田龍郎さんは、自分が中心となり設立した「ボランティア仲間九州ラーメン党」のメンバーに、阪神行きの準備を依頼しました。そして迎えた出発の日、誰もが見送りだと思った濱田さんはマイクロバスに飛び乗り、仲間と共に熊本から被災地へと向かったのです。

鍋やコンロなどの調理器具とラーメンの食材を積んだバスは一路被災地を目指し、神戸に着くと3日間で約1000杯のラーメンを提供。その後も阪神・淡路大震災の被災地を3回訪れ、3年間で1万杯のラーメンを振る舞いました。

濱田さんがラーメンのボランティアを始めたきっかけは1998年。熊本県益城町でラーメン店を営んでいた濱田さんは、ある日、近所にできた障がい者施設から出前の注文を受けました。施設に入った濱田さんが「こんにちは、福ちゃんラーメンです」と声を掛けると、ひとりの少年が大声をあげながら突進してきました。ラーメンを守ろうと思わず後ずさりした濱田さんに近づいた少年は、岡持ちに手を伸ばすとうれしそうに施設内に運んでくれたのです。「お手伝いしたい」という気持ちからの行動だったと施設の人に聞いた濱田さんは、「人は誰でも人のためにできることがあるんだ」と少年から教えられたような強い衝撃を受けたそうです。

その日から、出前のたびに施設の利用者と触れ合うのが楽しみとなった濱田さんでしたが、施設の食堂が完成すると注文はぱったり途絶えてしまいました。日増しに寂しさが募った濱田さんが施設に連絡すると、施設長から「利用者に外食をさせようとあちこちのお店に電話をしても、障がい者施設であることを理由にいつも断られてしまうのです」と聞き、お店に招待することにしました。

濱田さんのボランティア活動の原点となった「福ちゃんラーメン」

被災地でも福祉施設でも皆を笑顔にする温かいラーメン

福祉施設での
ラーメンを通した交流会は、
九州ラーメン党結成時から続く
大切な活動だ

皆と一緒にラーメンを楽しむのが何よりうれしい

20人も入ればいっぱいの「福ちゃんラーメン」に、障がい児や施設のスタッフ約50人が来店。このとき、「おじちゃんおいしい」「ありがとう」と言って、皆が笑顔でラーメンをほおばる姿に、濱田さんは「ただ、心が洗われた」と話します。これを機に、他の障がい者施設や高齢者施設の人たちを招待したり、遠方へは調理器具や食材を積んで出かけるようになりました。

20人で「ボランティア仲間九州ラーメン党」を結成

ボランティアでラーメンを振る舞う活動には、家族の協力も欠かせません。奥さんの幸子さんは活動を始めた当時を振り返り、「主人をひとりの人間として尊敬し、感謝もしていましたので、好きなことをしてください、私もついていきますという気持ちでした」と微笑みます。3人の娘さんも、遠方にボランティアで出かけるときには「今度はどこに行くの?」と明るく送り出してくれたそうです。

「人は人のために生きてこそ人」を実践

ボランティアを始めて2年ほど経った1991年6月、長崎県の雲仙普賢岳が噴火。現地の障がい者施設が被災したことを知った濱田さんは、仲間を募り、炊き出しの用意をして駆けつけました。この活動が契機となり、濱田さんを中心に翌年の12月、商店経営者や農家、新聞配達員、主婦など約20人で「ボランティア仲間九州ラーメン党」が結成されました。こうして、障がい者支援と被災地支援が活動の2本柱となったのです。

「そよかぜ福祉作業所」で作ったパンやクッキーを、車に積み込む利用者の皆さん

幅広い年代が働く福祉作業所
ラーメン店の箸袋も皆さんの手作りだ

その後、「ボランティア仲間九州ラーメン党」は、1999年4月に熊本県認定第一号のNPO法人格を取得。三宅島噴火、東日本大震災、九州北部豪雨、西日本豪雨、北海道胆振東部地震をはじめ、多くの被災地に九州ラーメン党のメンバーが駆けつけ支援を行っています。特に2011年に発生した東日本大震災では宮城県の気仙沼市や石巻市、福島県のいわき市などで合計14日間に及ぶ活動をしました。「その後も毎年被災地を訪れて親交は続いています。温かいラーメンが人と人の心をつなぐことを改めて実感します」と、濱田さんは想いを語ります。

さらに、2016年の4月に地元熊本県益城町が最大震度7を記録した熊本地震では、自らも被災しながら本震の翌日には自分の敷地でラーメンの炊き出しを開始。東日本大震災の被災地をはじめ、これまで支援した人たちが応援に駆けつけ、9月までの5カ月間にわたり約2万杯のラーメンを提供し続けました。

家族や仲間と共に、さらに活動は広がる

九州ラーメン党の活動の、もう一つの柱である障がい者支援も、福祉作業所での仕事や福祉施設でのラーメン交流会の開催に、3人の娘さんやその家族も加わってしっかり継続されています。運営する「そよかぜ福祉作業所」や「そよかぜショップ」では、お弁当やパン、クッキーなどを作って販売したり、チラシの詰め込みなどを行う作業に、10代から70代までの20人ほどの障がい者の方が携わり、作業所の中には笑い声が絶えません。

障がい者の就労支援にもなっている直営ラーメン店は、メニューが豊富で店内の雰囲気も明るい

濱田さんのラーメン店は老朽化などもあって2010年に閉店しましたが、2017年には九州ラーメン党直営のラーメン店がオープン。障がい者の就労支援施設として店内では障がいのあるスタッフが働いています。「作業所やラーメン店で働くスタッフは全員家族だと思っています」と濱田さんは笑顔を見せます。

2016年の熊本地震では、自らも被災しながら本震の翌日からラーメンの炊き出しを開始

「人は人のために生きてこそ人」と座右の銘だという濱田さん。一緒にラーメンを食べて楽しみましょうという障がい者施設との交流から始まったボランティアは、災害被災地での活動も含めてこれまで延べ650カ所に及び、提供したラーメンは10万杯を超えます。

濱田さんは言います。「家族がいなければ今の自分は100%ありません。そして、一緒に頑張ってきた仲間がいてこそ今の自分があるのです。人は人とのつながりの中でしか生きられません。だから自分には感謝しかないんです」と。

全国不登校新聞社によせて

不登校の子たちの心は固く閉じていることが多いと思います。
そこを諦めずにエールを送り続けるその優しさと行動力に感動しました。
武田 双雲

03 | CITIZEN OF THE YEAR 2018

不登校の子どもたちや親に当事者視点で寄り添い続ける

NPO法人 全国不登校新聞社／ぜんこくふとうこうしんぶんしゃ　東京都文京区

NPO法人 全国不登校新聞社

伝えたい。学びの場は学校だけじゃないことを

「自分と同じだと思い何度も読み返しました」「不登校新聞と出会い不登校を卒業できました」
当事者の視点で子どもたちや父母に情報を届け続ける不登校新聞にとって、学校以外にも学び成長できる場があることを知り、生き生きと新たな道を歩んでもらえることは、何ものにも代えがたい喜びです。

編集会議での編集長の石井さん（中央）と代表理事の奥地さん（左から2番目）。会議ではスタッフや「子ども若者編集部」のメンバーたちが活発な意見を交わす

衝撃的な事件を受け当事者視点の新聞を創刊

自身が不登校の子どもを持つ経験をしていた奥地圭子さんは、「登校拒否を考える会」という親の会やフリースクール「東京シューレ」を開設するなど、長くこの問題に取り組んできました。また、学びの場は学校だけではないことを訴えようと、フリースクールの生徒と一緒に新聞の取材を受けることもありましたが、子どもたちの本当の気持ちを伝えるのは難しく、「自分たちで発信するメディアを持ちたい」と思っていました。

そうした中、1997年8月31日、夏休み明けの登校を苦にしたと思われる中学生の焼身自殺がありました。さらに同じ日、別の中学校では、学校が燃えれば行かなくてすむと思った生徒たちによる放火事件が発生しました。相次ぐ衝撃的な出来事に、奥地さんは改めて「学校以外にもたくさんの生き方があることを伝えたい」と強く思いました。

こうして、1998年5月1日、奥地さんが中心となり、これまで広げてきた全国ネットワークの協力を得て、日本で唯一の不登校専門紙「不登校新聞」が創刊されたのです。

編集方針に「当事者視点」を掲げて誕生した不登校新聞は、創刊後の反響が大きく、その年のうちに発行部数が6000部に達しました。月に2回の発行で、紙面は不登校経験者へのインタビューやイベントの告知、親の会の情報など8ページで構成。不登校経験者や不登校の子を持つ親の体験談なども紹介され、多くの読者にとって心の拠り所となっていきました。

1998年の創刊以来、不登校の子どもたちに寄り添ってきた不登校新聞。発行は500号を超えている

憧れの人の取材を通し、生きている実感！

さらに、「子どもの気持ちは子どもに学ぶ」という考えのもと、不登校や引きこもりの当事者・経験者が企画や取材にボランティアで参加する「子ども若者編集部」も設置。当初のメンバーは10人ほどでしたが、現在では北海道から九州まで10～30代の約130名が登録し、企画・取材・編集に携わっています。

子ども若者編集部の取材には、樹木希林さんなど多くの著名人が協力

悩みを持つ当事者が、同じ悩みを持つ読者へ発信

2006年から編集長を務める石井志昂（しこう）さんも、そんな不登校経験者の一人。最初は取材される立場で不登校新聞とかかわり、その後「子ども若者編集部」に参加して企画や取材に携わるようになりました。「そうした中、憧れのコピーライター、糸井重里さんへの取材が、この仕事に深くかかわるきっかけになりました。自分の話をきちんと聞いてもらい、糸井さんにもたくさん話を聞かせていただいて、最後に『今日は楽しかった。ありがとう』と言って握手してもらいました。そのとき、本当に救われた気持ちになって、生きている実感を持つことができたのです」。その経験を原点に、自分が感じた想いや生きている実感を全国の読者に伝えたいと思った石井さんは、仕事として不登校新聞の制作に取り組もうと心に決めたそうです。19歳のときでした。

不登校新聞で最も反響の多いのが、当事者である「子ども若者編集部」が憧れの人を取材するインタビュー記事です。取材を受ける側も親身に答えてくれ、「映画監督の押井守さんを取材したときも、引きこもりの女の子がどう生きればいいのか悩んでいる気持ちを素直にぶつけました。それに対し、監督も真剣に向き合って答えてくれ、取材を終えると彼女は『今日は本当に生きている気がしました』と実感をこめて言ったのです。それはまさに、自分がかつて感じた想いと一緒でした」と石井さんは話します。編集長となった今も、子ども若者編集部のメンバーには、「自分が悩んでいることを自分の言葉で聞いてください。それが取材になりますから」と言って送り出すそうです。

石井編集長が不登校新聞の制作に携わる原点となった、糸井重里さんの取材

廃刊の危機も、読者の声に支えられ復活

これからも、不登校の悩みに寄り添い続ける

2015年、内閣府の資料に基づき、18歳以下の自殺が夏休み明けの9月1日に突出して多いことを報道したのも不登校新聞です。このニュースは各メディアが後を追い、長期休暇後の子どもたちに注意が必要なことを社会が認識するきっかけのひとつにもなりました。

しかし、そんな不登校新聞にも、20年を超える歴史の中には廃刊の危機がありました。最大で6000部あった発行部数が、活字離れの影響などもあり2012年には820部まで減少。「WEB版にしようか」「雑誌にしてはどうか」と、打開策を模索する日々が続きましたが、ついに休刊予告を発表するまでになったのです。

ところが、それを知った読者からは「当事者の生の声、生の情報をもっと聞きたい」という声が続々と寄せられ、自分たちの新聞がいかに多くの人に求められているのかを再認識。以前から、「子どもの悩みで死ぬことまで考えたのが、不登校新聞のおかげで救われました」といった母親の声も寄せられており、奥地さんも「この新聞は絶対に廃刊にしてはいけない」という想いを新たにして奮起。月2回の発行を全国で待っている読者のため、WEB版の創刊や紙面改定など大胆な施策を実施し、さらに他のメディアが取り上げてくれたこともあり、部数を増加に向かわせることができたのです。現在は、休刊予告を出したときの4倍の3500部まで回復しています。

創刊から21年。不登校の当事者に接するとき、奥地さんがいつも大切にしてきたことがあります。それは、まず自分の気持ちを白紙にして、相手の話を聞くこと。子どもが不登校になったり、いじめを受けたりすると、親はどうしても自分の気持ちが前面に出て、子どもの立場で考えることができなくなりがちです。そうした親の話を聞くときも、まず相手の気持ちをすべて受け止めるのが大切で、そうすれば相手も自分の話に耳を傾けてくれ、子どもの本当の気持ちに気づいてくれるそうです。

これまで延べ1000人を超える不登校経験者が取材や執筆に関わり、発信する側も受け取る側もさまざまな生き方のヒントを得てきた不登校新聞。これからも、そうした一人ひとりの悩みに寄り添い、当事者視点の記事を届け続けていきます。

当事者の生の声を伝えるため、取材では相手の心の声にも耳を澄ませる

当事者の想いが読者に伝わるか、記事完成までスタッフの奮闘は続く

スタッフ全員が「当事者視点」を揺るがぬ信念に情報発信

これまで、延べ1000人を超える不登校経験者が取材や執筆にかかわっている
（写真は難病のコラムニスト・伊是名夏子さんへのインタビュー）

対談

共感し、つながり合えることが社会を変える大きな力に

2018年度受賞者
NPO法人
全国不登校新聞社

シチズン・オブ・ザ・イヤー
選考委員長
山根 基世さん

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、2018年度の受賞者、全国不登校新聞社の奥地圭子代表理事と石井志昂編集長をお迎えし、不登校新聞発行に込める想いやこれまで果たしてきた役割の大きさ、存在意義などについて伺いました。

子どもの声に気づき不登校への考えが一変

山根　奥地さんは学校の先生でいらして、お子さんの不登校を経験されました。そのときはどんな想いでしたか。

奥地　最初は、学校に行こうとするとお腹や頭が痛くなったんですね。当時は、子どもは学校にいくものだと私も思っていましたし、何とか行かせているうちに拒食症になってしまったのです。

山根　体の症状として拒絶しはじめたんですね。

奥地　それが2年くらい続いたころ、子どもの登校拒否に取り組まれている児童精神科医の渡辺位先生を知ったのです。

山根　それでお子さんを連れて行かれたのですね。

奥地　「お母さんは、そこで聞いていてください」と言われ、息子と二人で2時間も話し込んでくださいました。話の途中で先生が、息子が話すこれまでの辛い体験やそのとき思ったことに共感されると、息子の表情がパッと明るくなるんです。

山根　お子さんは先生と話しながら、何かに気づいたのですね。

奥地　帰る途中、息子が「お母さん、羽が生えたようないい気持ちになった。こんな気持ち何年ぶりだろう。お腹が空いた！おにぎりが食べたい！」って言って。大急ぎで家に帰っておにぎりを作ったら、うまいうまいと全部平らげたんです。

山根　すごい！

奥地　そのとき息子が、「お母さん、僕は僕でよかったんだね。先生に会ってそう思った」と言ったんです。その言葉に私はハッとしました。子どもの立場で考えていなかったことに気づいたのです。

山根　石井さんは、不登校になるまでにどんな葛藤があったのですか。

石井　中学受験の失敗から始まり、理不尽な校則やいじめなどが重なって、自分でも説明がつかない精神状態になったんです。学校に行こうとすると階段がグニャッと曲がって見えたり、踏切の警報器が鳴り出すと呼ばれているような気がしたりして。

山根　心の中に渦巻いているものが、症状になって出てきたんですね。

不登校新聞は文学として残るようなすばらしい記録です

石井　そんなとき、母親から「明日、学校どうする？」と聞かれたんです。「行けない」って答えた瞬間、涙がドーッと出てきて。母親は驚いたものの「わかった」と言って、2週間休みますとすぐに学校に連絡してくれたんです。

山根　石井さんはお母さんの判断に救われたのですね。

共感できるからこそ心を開いてつながれる

山根　その後、奥地さんは不登校の子どもを持つ親の会やフリースクールを作って長くこの問題に取り組まれてきました。不登校新聞の創刊は1998年ですね。そのときはどんな想いでしたか。

奥地　ちょうど、家庭内暴力に悩んだ家庭で悲惨な事件があったのですが、一般紙は全部大人の視点に立った記事ばかりでした。でも、私たちは追い詰められていた子どもの視点で創刊号の一面にその記事を載せたのです。

山根　当事者視点という原点は、創刊号から始まっていたのですね。石井さんはいま編集長という立場にあるわけですが、ご自身では不登校新聞をどのように捉えていますか。

石井　新聞は読者に対して新しいことや知らないことを伝えるのが役目です。でも、不登校新聞は皆さんが共感できることがいちばん大切なのです。読者の方からも「うちと同じです」といった共感の声をたくさんいただきますが、そのことで気持ちの整理がついたり、勇気が湧く手助けになれたりするところに、私たちの新聞の存在意義があると思っています。

奥地　読者のお母さんたちがメールで交流されている、メーリングリストも同じですね。「学校からこう言われた」「ゲームばかりしている」などの投稿や、「うちはこう対応した」といった情報を共有し合い、「うちだけじゃないんですね」「元気が出ました」といった共感を通し、どんどんつながりが広がっています。

山根　悩んでいるのは自分だけじゃないと思えること、そしてつながれる仲間がいるというのは大きな救いになりますね。私は不登校新聞を最初に読んだとき、普通は自分の想いをここまで書けないと驚いたんです。でも、同じ悩みや苦しみを味わっている同士だからこそ、心を開いて話すことができる、そういう場なんだとわかってきました。

学校に行かなくても何一つ終わらない

山根　ただ、その一方で不登校の割合は増えていますね。それを見ていると、社会のどこかが子どもたちを苦しめる仕組みになっている気がします。

子どもたちが自分らしく生きられる情報を発信したい

奥地　学校というのは学ぶ権利を満たすところですが、子どもは一人ひとり違いますから、自分の個性にあったところで学び育っていくことが大事だということを、不登校の問題は教えてくれているのです。そして、学校以外の選択をした子どもたちが、差別されたり不利にならない仕組みや意識に変えていく必要があると思っています。

山根　子どもたちが鳴らしている警鐘を、社会がどう受け止めるかが重要ですね。

石井　現在は、選択肢に多様性がありません。学校のあり方が多様になってくれれば、不登校の問題もおのずと変わってくるのではないかと思っています。

奥地　そういう点では、2016年に文部科学省が不登校を「問題行動」と判断してはならないと全国に通知し、「学校復帰」にこだわらない方針を示したことは大きな進展です。

山根　そうした変化が表れてきた中で、石井さんは編集長としてこれから不登校新聞をどうしていきたいと思われていますか。

石井　一つには、子どもたちがそれぞれ自分らしく生きていける多様な選択肢の情報を発信していきたい。そしてもう一つは、自分のミッションとして、不登校になり人生が終わってしまったと感じた14歳の自分に今の自分が何と言ってあげられるかを、しっかり探していきたいと思っています。

山根　でも、石井さんは「学校に行かなくても、普通の未来が待っていて、大好きな人と結婚をしたり、ケンカをしたりしています。学校へ行けなくても、終わったことなんて何ひとつありません」と発言されていて、それが答えになっている気がします。石井さんの今の生き方をそのまま見せることが、すばらしいロールモデルになると思います。

石井　不登校になったからといって、人生が終わった訳ではないということは、今悩んでいる子どもたちにいちばん伝えたいですね。

一人ひとりが個性にあったところで学び育つのが大事

奥地　大事なのはそれぞれの子どもが自分の形で生きていくのを、親や社会が温かい眼差しで見守れることだと思いますね。

山根　私はこの不登校新聞が、子どもたちがどんな苦しい想いをしてきたかを伝える貴重な記録になっていて、これはもう文学として残るのではないかとすら感じました。ぜひ一般の人にも読んでほしいです。本日はありがとうございました。

（敬称略）

当事者の声が社会を変える

不登校のような社会問題の解決にはまず当事者の声が重要で、不登校新聞は当事者が率直な声を上げてつながれる大切な場所になっており、世の中を変える大きな力になっていくと思います。今度は私たちがそうした率直な声をどう受け止め、どう解決に結びつけていけるか考えていく番だと思います。

山根基世

CITIZEN OF THE YEAR
1990-2018
受賞者の皆さん

1990年に創設され、これまで29回にわたり、市民に感動を与え、
社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。
1990～2018年度の受賞者の皆さんの素晴らしい活動をご紹介します。

2018年度

NPO法人「飛んでけ!車いす」の会
ボランティアの旅行者を募り、80カ国以上に車いすを届けて20年

濱田 龍郎さん
被災地や福祉施設を訪ね、10万杯を超えるラーメンで心も体も温める

NPO法人 全国不登校新聞社
不登校の子どもたちや親に寄り添い、当事者視点で情報発信を続ける

2017年度

清水 辰吉さん
地元小学校の新入生に55年以上の間欠かさず入学記念の苗木を贈り続ける

グリズデイル・バリージョシュアさん
障がいのある外国人旅行者に役立つ日本観光情報サイトを制作・運営

角居 勝彦さん
引退した競走馬の命を守り、幅広い分野でセカンドキャリアを支援

2016年度

NPO法人 就労ネットうじみっくすはあつ
野球ボールの再生を通し、地域との交流や障がい者の就労支援に貢献

塗魂ペインターズ
国内外を問わず駆けつけ、無償で塗装ボランティアを行う

堀内 佳美さん
読書が身近にないタイで、読み聞かせや幼児教育に献身

2015年度

NPO法人 JHDAC
病気などで頭髪の悩みを抱える子どもたちにウィッグを無償で提供

山崎 充哲さん
多摩川の生態系を守るため外来魚を預かる「おさかなポスト」を運用

白石 祥和さん
不登校や引きこもりの若者たちに寄り添い、自立や就労支援に取り組む

2014年度

原田 燎太郎さん
過酷な生活を余儀なくされている中国の元ハンセン病患者を支援して10年

本間 錦一さん
水難救助隊長として40年、海の安全を見守る87歳の現役ライフセーバー

阪井 ひとみさん
社会的支援が必要な人たちが地域で暮らし自立できるよう、入居支援を続ける

高山 良二さん シチズン特別賞
地元住民たちと共に、カンボジアで地雷処理と復興支援を続ける元自衛官

2013年度

TOY工房どんぐり
障がい児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年

チャイルズエンジェル
子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈

上中別府 チエさん
高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む

2012年度

吉村 隆樹さん
障がい者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供

渡辺 玉枝さん
自然体の生き方で、2度のエベレスト女性最高齢登頂記録を達成

ルダシングワ 真美さん
紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身

2011年度

税所 篤快さん
バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む

竹内 龍幸さん
盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける

笹原 留似子さん
東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2010年度

吉田 守松さん
半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける

吉岡 諒人さん
夏休みの観察・実験を通じ、"アリジゴクは排泄しない"という通説を覆す

樋口 強さん
がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年

2009年度

吉島 美樹子さん
がん治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている

多以良 泉己さん
リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている

茂 幸雄さん
福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う

2008年度

伊藤 和也さん（故人）
戦禍のアフガニスタンを緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる

川崎個人タクシー協同組合
知的障がい施設の子どもたちと行く"タクシードライブ遠足"を30年間継続

出水市立荘中学校
ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀

2007年度

西谷 勲さん
中学の夜間学級に50年間仕送りを続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る

車内清掃を続ける高校生 有志
JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い

谷垣 雄三さん
西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる

2006年度

川越 恒豊さん
刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける

桑山 利子さん
スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす

有城 覚さん
交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園

2005年度

堀田 健一さん
障がい者一人ひとりのニーズに合わせた自転車を、手作りで26年間作り続ける

吉野 健治郎・勝 親子
親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける

日本スピンドル製造株式会社 社員一同
JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施

2004年度

新宮山彦ぐるーぷ
20年にわたり大峯奥駈道（熊野古道）の南半分約45キロの整備を続ける

兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部 有志
水没していく観光バスの上で励ましあいながら全員が無事生還

永井 利夫・サヨコ ご夫妻
子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた

2003年度

高松 由美子さん
長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援

遠藤 マルシア アケミさん
お弁当の配達が縁で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校

曽我 健太さん
ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘

2002年度

谷村 基さん
励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける

武井 弥生さん
東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続

アフガニスタン義肢装具支援の会
アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈

2001年度

伊藤 明彦さん
全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録

大島 誠人さん
自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見

菅谷 昭さん
チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事

2000年度

近藤 原理・美佐子 ご夫妻
障がい者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた

ジュンコアソシエーション
ベトナムの子どもたちの教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続

福祉工房あいち
障がい者一人ひとりの障害度に合わせて、補助器具を考案し、製作

1999年度

セイヤー・ミドリさん 与那嶺 政江さん
在日米軍の父と地元女性の間に生まれた子どものために、学校を開設

トーマス・カンサさん
修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台

録音グループ「声」の皆さん
視覚障がい者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年

1998年度

岸本 康弘さん
ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む

金子 聡美さん 安田 志津さん
ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断

「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん
電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る

1997年度

葛木 みどりさん
南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現

高澤 圭介・ナミ子 ご夫妻
私財を投じてお年寄りや障がい者が気軽に立ち寄れる家を完成

愛知県立東山工業高等学校 車いす部
高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1996年度

小山 道夫さん
ベトナムの子どもたちのため、職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設

福岡 明夫さん
自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録

古川 ヨシさん
障がい者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師

1995年度

川田 龍平さん
命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身

木村 三男さん
濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出

神戸商船大学「白鴎寮」自治会
阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出動

1994年度

星野 勇・シズエ ご夫妻
足の不自由な方のために1,000足を超える靴を無償で修理・改良

山下 秀治さん
知的障がい者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築

森本 春子さん
山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける

1993年度

宇佐美 松恵さん
1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る

佐藤 昭夫さん
パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年

8/6 竜ケ水駅災害救助活動グループ
土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助

1992年度

清水 ルイーズさん
日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている

千川 文次さん
絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元

『雄冬新聞』歴代編集長
地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー

1991年度

チョン・キューキョンさん
長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ

馬場 国敏さん
湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地で活動

十円会
月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献

1990年度

加藤 幸男さん
バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助

鈴木 陽子さん
過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動

林 錬友さん
使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付

CITIZEN

NPO法人
全国不登校新聞社

不登校の子どもたちや親に
当事者視点で
寄り添い続ける

NPO法人
「飛んでけ! 車いす」の会

旅行者の協力に
支えられ
車いすを届けて20年

濱田龍郎さん

全国の被災地や福祉施設に
10万杯超の
ラーメンを提供

シチズン時計株式会社
〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12
TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280
https://www.citizen.co.jp/coy/index.html

CITIZENはシチズン時計株式会社の登録商標です。

2019年6月発行